

公園の日蓮

—福岡市博多区東公園《日蓮銅像》の歴史的意義について—

高瀬 航平

はじめに

本稿は、明治 37 (1904) 年 11 月 8 日、福岡県福岡市博多区東公園にて除幕された《日蓮銅像》⁽¹⁾を対象とする(図 1)。まず先行研究を参考に近代日本における銅像の位置づけについて確認し、続いて《日蓮銅像》の事例としての特異性について論述する。



図 1 《日蓮銅像》(執筆者撮影)

「銅像」とは、「實在・非實在を問わず人物の肖像彫刻で、かつ金属製であり、主にその人物を顕彰し、その功績を後世に伝えようとして屋外に建てられたもの」である⁽²⁾。確かに銅像を「銅を材料とした彫刻」と見れば、その作例は仏像などに古くから確認できる一方、前記のように機能的に定義するならば、それが日本で設立されるようになったのは明治以降とされている⁽³⁾。《大村益次郎銅像》(靖国神社境内, 1893 年)、《西郷隆盛銅像》(上野公園, 1898 年)、《楠木正成銅像》(皇居前広場, 1900 年)が初期の代表的な作例であり、昭和前期まで数多く建設されたが、第二次世界大戦下での金属供出及び戦後 GHQ による調査・撤去といった二度の契機に際し、その大半が失われた⁽⁴⁾。

では何故宗教研究の対象として、銅像を取り上げるのだろうか。その理由は、近代日本において銅像に期待された役割にある。明治 9 (1876) 年 11 月 18 日に教部省が太政官に提出した伺「官社へ銅石設立之儀ニ付伺」は、国の公文書にて銅像

へ言及がなされた初例として知られるが⁽⁵⁾、そこでは「神社ノ儀ハ古来偶像祭祀ノ典礼ニハ無之候得共」としたうえで、「功績歴然タル」、「近代ノ功臣ヲ祭祀」するに当たりいまだ「社殿造築」の

なされていない場合には、「西洋モニュメントノ体ニ倣ヒ祭神ノ銅石像等ヲ設立」した方が「後来營繕等ノ經費ハ減少」する見込みがあると述べられていた⁽⁶⁾。また明治 19 (1886) 年 6 月 8 日付内務省訓令第 397 号「記念碑を官有地に建設せしめざる件」は、官有地に記念碑を建てる場合、事前に「国家ニ功勞アルモノ及頌揚スヘキ事跡アルモノ事由ヲ具シ伺出ヘシ」と義務づけた⁽⁷⁾。明治 33 (1900) 年 5 月 19 日内務省令第 18 号「形象取締規則」第 1 条でも、「墓地境内ニ於テ慣例ニ依リ礼拝ノ用ニ供スルモノ」と「官有地及公衆ノ往来出入スル地」に設置される「人物其ノ他ノ形像」とが区分され、後者には内務大臣以下の許諾を要すると定められていた⁽⁸⁾。

要するに、墓地境内より他の公共性の高い場所において「礼拝」を目的とする像を設置することは、政府により規制されていた一方、代わってそこに建てられた銅像を眺めることは、銅像が人物の功績や国家への功績を記念したものである以上「礼拝」ではなかった。実際に眺める側の意見としても、例えば明治 32 (1899) 年 6 月『太陽』の「宗教界」欄では、「記念祭は歴史的発揚として挙行するは最も適当なる方法なり、祭祀の意義を付与するは文明の進歩したる今日に古代宗教を復興する者、決して記念の分にあらず」と「記念」と「祭祀」を峻別していた⁽⁹⁾。そのためか、銅像の像主として宗教関係の主題が選択されることは稀だった。昭和 3 (1928) 年、初版が二六新報社より刊行された『銅像写真集 偉人の倂』には、日本全国六百三十二体分（重複分を除く）の銅像の図版とデータが収録されているが、澁谷明恵によれば、像主身分が「僧侶」・「神官」である銅像は、最多の「実業者」18.0%に対し全体の 3.2%に過ぎず、「地方的功勞者」11.7%や「〈国政〉政治家」8.7%と比べても多いとは言えない⁽¹⁰⁾。この事態を「明治以降のいわゆる銅像は〔……〕宗教とは異なる象徴的意味（像となる人物の精神の抽出、公衆に対する教化的意味合い）を表現する」⁽¹¹⁾と解することもできるだろうが、また大日本帝国憲法下で「信教の自由」と「神社祭祀＝非宗教」を両立させた枠組みの一環として位置づけることもできるだろう⁽¹²⁾。木下の指摘する通り、「明治政府の宗教政策の中に、銅像の歴史をとらえることが必要」なのである⁽¹³⁾。

すると《日蓮銅像》は、近代日本の銅像の作例としてはかなり特異な事例と言える。それはこの銅像の受容のされ方からも伺える。既に大正 5 (1916) 年に刊行された『現代の福岡市』には「上人の功德海内に普き賽者踵を接して香華の烟常に絶えず」とあるが⁽¹⁴⁾、現在でも博多駅から北方に約 1.5km の地点に所在する《日蓮銅像》を訪れると、その前で題目を唱え線香を供える人びとと出会うことが多い。「この銅像は生きた礼拝対象なのである」⁽¹⁵⁾。

ならば何故《日蓮銅像》は、寺院の塔頭内や境内でなく屋外の公園に建設され、また建設され得たのだろうか。この疑問に答えるため、まず第一章では《日蓮銅像》のデータ及び発足から竣工までの経緯を概観しておく。

1. 《日蓮銅像》の基本情報、建設経緯及び先行研究

1-1 《日蓮銅像》のデータ

《日蓮銅像》に関する刊行された一次資料集は以下の三点である。①建設運動のパンフレットである、小野学鶯編『元寇記念日蓮銅像誌』（立正社、1899 年 2 月、1904 年 10 月、1904 年 12 月、1930 年 4 月の計四版、以下『像誌』と略称、引用には主に第四版を利用する）、②昭和 54 (1979) 年の胎内調査の結果に加えて「谷口鉄工場日誌」など①に無い関連資料を掲載した、中牟田佳彰・田中一幸・木下禾大『福岡市東公園日蓮上人銅像 制作工程と歴史資料』（西日本新聞社、1986 年）、

③平成 16（2004）年 10 月 28 日「日蓮聖人銅像創立百年祭」の記念に出版、佐野前励の伝記である原田種夫『佐野前励上人』（日蓮聖人銅像護持会、1966 年）の復刻版を収録した、佐野前暁編『博多大銅像百年祭記念出版 日蓮聖人大銅像百年の歩み』（日蓮聖人銅像護持教会、2004 年）である。このほか昭和 54 年『西日本新聞』夕刊の連載記事「二つの日蓮銅像」、「続二つの日蓮銅像」が《日蓮銅像》に関係する人物の貴重な証言を紹介している⁽¹⁶⁾。

これらを基に《日蓮銅像》の基本情報をまとめると以下の通りである。

《日蓮銅像》は、ブロンズ製、像高約 10.6m、総重量 74.25t の立像である⁽¹⁷⁾。像主は鎌倉時代の僧侶日蓮（1222 - 1282）。裾の長い素絹の法衣に五條袈裟を着用、左手には『立正安国論』の卷子本を掲げ、右手には数珠を持った意匠となっている⁽¹⁸⁾。建設予算は 10 万円。発起人は、日蓮宗僧侶の佐野前励（1859 - 1912）。明治 23（1890）年の発足から、原型制作を東京美術学校彫刻科教授の竹内久一（1857 - 1916）が、鑄造を同校鑄金科教授の岡崎雪声（1854 - 1921）と佐賀藩の御用鑄物師だった谷口鉄工場がそれぞれ担当、明治 37 年 11 月 8 日に除幕式を迎えた。高さ約 10.6m の台座は銅製の八角柱で、それぞれの面には 2.46m×2.16m の銅製レリーフが 8 枚嵌めこまれている。正面の 1 枚には小松宮彰仁親王（1846 - 1903）の揮毫を元にした「立正安国」の文字が鑄造され、残りの 7 枚は日蓮の法難図の銅版画となっている。版画の原画は洋画家・パノラマ画家の矢田一嘯（1858 - 1913）が担当し、原画から原型を起こしたのは博多人形師の白水六三郎、鑄造は銅像本体と同じく谷口鉄工場と、福岡藩の御用鑄物師の深見鉄工場である⁽¹⁹⁾。《日蓮銅像》は平成 11（1999）年度福岡市指定文化財に登録された⁽²⁰⁾。

1-2 《日蓮銅像》の建設経緯

続いてその建設過程も概観しておこう。そもそも何故《日蓮銅像》の建設地として、博多が選択されたのだろうか。というのも日蓮自身は九州に足を踏み入れたことがなく、また銅像が建設された当時福岡の日蓮宗の教勢は必ずしも盛んとは言えなかったからである⁽²¹⁾。この問いに端的に答えるならば、それは《日蓮銅像》の建設が、先行する「元寇記念碑」設置運動に触発されるかたちで始まったためだ、ということになる。

明治 21（1888）年 1 月、当時の福岡警察署長であった湯地丈雄（1847 - 1913）⁽²²⁾が「元寇記念碑建設義捐金募集広告」を発表した⁽²³⁾。そこには蒙古襲来を「記念」する石碑がその古戦場に一つも無く、また元軍撃退に功あった武士の追悼も充分でない現状を憂え、「古英雄の偉勲を、不朽に旌表し、魂魄も亦帰する所あらしめん」ために、円柱形の記念碑上部に騎馬武者（北条時宗）像が乗ったデザインの「一大記念碑」を建立すると記されていた⁽²⁴⁾。これは直接的には明治 19（1886）年 8 月、長崎に来航した清の北洋艦隊の水兵が起こした暴力事件「長崎清国水兵事件」を受けての発案だった。「元寇記念碑」は当初「粕屋郡志賀島村」の「蒙古首切塚」を作り変えて建造する予定だったが、明治 23 年 2 月に内務省から建設の許可を得た段階では、設置場所は千代松原、即ち現在の福岡市東公園周辺となっていた。東公園の開園は明治 9 年頃であるが、それ以前から園内には旧福岡藩主によって招魂社が創建されていた⁽²⁵⁾。また昭和 4（1929）年刊行の『福岡県碑誌 筑前之部』を見ると、園内には他に戊辰戦争・西南戦争などの戦死者や殉職した警察官を祀る招魂場、日清戦争戦没者の記念碑などが多数建っていたことが分かる⁽²⁶⁾。「元寇記念碑」建設の地に東公園が選ばれた理由には、以上のような土地柄も挙げられるだろう。

そのころ日蓮宗僧侶の佐野前励は、身延山一本山制を唱え寺院組織の改革運動に邁進していたものの、明治 21 年 8 月の総会にて京都の諸本山に合末論争で破れると、浅草正法寺から福岡県本佛寺へと遷された⁽²⁷⁾。佐野が湯地と出会い彼の事業への協力を決めたのはその前後のこととされる⁽²⁸⁾。

ただし佐野が当初計画したのは、日蓮の肖像を模した銅製レリーフを「元寇記念碑」へ挿入することだった。しかしこの試みは元寇記念碑に協賛する他の宗派からの反対に遭い、その結果日蓮宗側はレリーフ挿入を断念したものの、代わって単独で日蓮の銅像を建設すると決定した。これが《日蓮銅像》の建設に至る経緯である⁽²⁹⁾。明治 23 年 11 月 21 日、福岡県勝立寺に創立事務所が設置され、翌明治 24 年 5 月 21 日には内務省から博多東公園に建設の許可を得ると、明治 25 (1892) 年 4 月 23 日、同地で起工式が行なわれた。その後佐野以下十数名は「銅像建設布教員」を結成、日清戦争に伴う中断を挟みながらも、明治 32 年まで九州・四国・中国・近畿・北陸・関東・東北の各県を回り、寺院や劇場などで法会や説教、幻燈会を催し義捐金を募った。このとき寄付された古鏡は銅像の材料の一部に利用された。並行して《日蓮銅像》建設運動は、発起人に各本山の貫主が名を連ねるなど「宗門一致」の事業として盛んに喧伝された。

募金活動の一方、銅像制作の過半を担当したのは東京美術学校だった。当時美校は、教員の研究と生徒の教育に役立て、かつ世間に対して美術の品位・模範を示すために校外から制作を受注し教員に担当させていたが、《日蓮銅像》の制作もこの「嘱託制作事業」の一環だった⁽³⁰⁾。

明治 25 年、《日蓮銅像》の雛形制作が美校に嘱託、そのコンペには同校生徒の下村観山 (1873 - 1930) の「右の手に安國論の巻物を持ち左の手には数珠を持った」日蓮の図案が、台座は同じく生徒の島田佳矣 (1870 - 1962) の図案が、それぞれ一等に選ばれた⁽³¹⁾。その後雛形制作の担当者となった彫刻科教授の竹内久一は更に細かい考証を加え図案を作成、まずは五十分の一木製雛形を制作し、そこから明治 26 (1893) 年 8 月 31 日、鑄金科教授の岡崎雪声が五十分の一銅製雛形を鑄造した⁽³²⁾。引き続き明治 27 (1894) 年 2 月 12 日には十分の一木製雛形、原寸大木製原型及び台座型の制作が美校に嘱託され、同じく竹内が担当、明治 28 (1895) 年に美校内の製作場で原寸大原型の制作に着手し、翌明治 29 (1896) 年 6 月に完成、次いで岡崎が同校の鑄造場で頭部、両手首、数珠、巻子本の鑄造に着手し、明治 31 (1898) 年に作業を終えた。完成した雛形、原型、鑄造済みの銅像のパーツは、明治 32 年 5 月から明治 33 年 4 月まで各地の寺院で公開されつつ佐賀へと搬送され、明治 34 (1901) 年 1 月 10 日から同地の谷口鉄工場が残りのパーツを十七回に分け鑄造した。明治 37 年 6 月 20 日に作業終了、同年 11 月 8 日東公園にて、《日蓮銅像》の「除幕開眼式」が執り行われた。

1-3 《日蓮銅像》に関する先行研究

さて、以上のような過程を経て完成した《日蓮銅像》について、先行研究ではその歴史的意義を主に二つの観点から論じてきた。

第一の観点とは《日蓮銅像》建設の時局性を指摘する立場である。そこでは《日蓮銅像》は、「明治二十年代からの対外的な緊張の高まり、最初の国難であった元寇の記念碑建設の気運、日清・日露戦争の戦勝祈願といった雰囲気の中で建設が計画され、義捐金によって完成した」銅像として論じられる⁽³³⁾。文永 11 (1274) 年 10 月と弘安 4 (1281) 年 5 - 7 月の二度に渡ってフビライ・ハン治世の元軍が対馬・壱岐・北九州に来襲した「蒙古襲来」と呼ばれる事件について、日蓮信仰の伝

統では、日蓮が文応元（1260）年の『立正安国論』にてこれを予言し、祈祷により神風を起こして元軍を撃退したと語られてきた。「近代を迎えると、こうした日蓮像が国家主義と結びついて、より強固なものとなる。〔……〕元寇記念碑建立を訴え、そこに日蓮の銅像を建てようとしたのは、その好例である」⁽³⁴⁾。このような意図を持つ《日蓮銅像》建設運動に反対したのは、「国家に対する宗教の優位性を認める立場」から「蒙古襲来に対する日蓮の態度をもっとも正当に理解しえた」、文芸評論家の高山樗牛（1871 - 1902）など少数に限られる⁽³⁵⁾。これが第一の観点の研究にて引かれる大まかな見取り図である。

これに対し第二の観点とは《日蓮銅像》の建設と日蓮信仰の伝統との連続性を指摘する立場である。《日蓮銅像》は「九州の地に於ける法華経信仰の中心霊場」として語られ⁽³⁶⁾、その建設事業は「聖人御在世當時をしのばせる折伏を専らとする法戦を展開」した「緊密な布教陣」によるものとされる⁽³⁷⁾。また《日蓮銅像》は、寺院に安置される他の日蓮の等身大座像と並置して紹介される場合もある⁽³⁸⁾。

このように《日蓮銅像》の評価を巡り、先行研究では相違点が見られるものの、つまるところ両観点は、「蒙古襲来と日蓮」にまつわる信念や慣行が近代まで一貫して存続し、それが《日蓮銅像》の建設にも繋がったと見る点では一致している。しかしながらこの見方では、まさに《日蓮銅像》が明治以降礼拝像と制度上切り離されるかたちで成立した銅像として近代日本に存在し得たというその歴史的意義を過度に単純化し、またそこに含まれる葛藤や緊張関係を見過ごしてしまいかねないのではないか。

むしろ《日蓮銅像》を取り上げる意義は、その多義性・越境性にあると考えられる。《日蓮銅像》は、①日蓮在世当時から礼拝の対象とされた「肖像彫刻」でありつつ、②明治以降国家に対し功績のあった歴史的人物や忠臣を顕彰するため設置された「銅像」でもあり、かつ③東京美術学校が制作に関与した「作品」なのである。したがって《日蓮銅像》を事例とすれば、近代日本における宗教と政治・歴史・芸術との関係の一端を考察することができるのではないか。

このような見込みの下本稿は、特に明治 22 - 37 年に亘る建設運動の過程で、《日蓮銅像》がどのような意義を持つと主張され、またどのように受容されたのかを、当時の資料に基づき跡付ける。調査対象とする主な文献は、明治・大正期日蓮宗宗務院の実質的機関誌であった『日宗新報』（以下『新報』と略称）である⁽³⁹⁾。当該期間の全体的な論調として『新報』は、《日蓮銅像》建設に対して協力的であった。筆者の調査した限り、直接的に《日蓮銅像》を批判した記事は二件しか確認できず、その紙面上の扱いも極めて小さい⁽⁴⁰⁾。それどころか他の新聞雑誌の《日蓮銅像》への反対記事は速やかに『新報』誌上で取りあげられ、かつ強い口調で反論された。以上より『新報』を調査すれば、主に宗務院による公式見解を追える点、日蓮銅像の建設を支持する言説を抑えられる点、反対記事に対する賛成者側の反応を拾える点の三点のメリットが見込まれる。ただし除幕式の祝辞など特に《日蓮銅像》と直接的な関係を持つ言説で『新報』に掲載の無いものは、『像誌』など他の典拠から補った。なお引用文の旧字体は適宜新字体に改め句読点を補った。

2. 《日蓮銅像》の建設意義：「日蓮の銅像」としての《日蓮銅像》

2-1 発足当初の《日蓮銅像》の建設目的

発起当初、《日蓮銅像》の建設意義や目的はどのように論述されていたのだろうか。

「元寇記念碑」へのレリーフ挿入計画を公表した日蓮宗宗務院論告には「我宗祖ノ元寇ニ与テ偉功アル」ことが「未ダ国史ニ載セザルヲ以テ本宗ノ外之ヲ知ル者稀ナ」のは「遺憾ノ至リ」であるから、「宗祖ノ肖像ヲ彫刻シ以テ不朽ニ伝エント欲ス」と謳われていた。ここで日蓮の「偉功」として挙げられたのは「当時立正安国論ヲ著述シテ鎌倉幕府ニ呈シ付テ外寇ノ来襲ヲ警戒シ」たこと、及び「同府ノ内命ヲ稟テ旗曼荼羅ヲ書」いたことである（『新報』明治 22 年 9 月 13 日付 1 面）。また元寇記念祖像建設事務所の「日蓮聖人銅像建設緒言」でも、「我祖日蓮聖人は斯る災害のあらん事を察し、夙に立正安国論を著し之を防がんと欲して一身を犠牲となし、肺肝を砕き給いし功績は遠く武門の右に出でたるも、悲哉後世弘安の事を記する者総て儒道の人なりしを以て、仏門の功德は努めて之を覆い賊艦退治の功を一に相模守に帰して、また日蓮聖人の達観偉勲を説者なし」とし、そんな現状を打破すべく「我祖の一大銅像を鑄造し奉り之を彼の元寇記念碑と共に並べ立て元寇当時我国の危急を救い給いし我祖日蓮聖人の功德を遠く千歳の下に伝えんとす」と説かれていた（『新報』明治 23 年 7 月 3 日付 15 - 16 面）。

ここで以下三点の注意点を指摘したい。

第一に、当初《日蓮銅像》は、「賊艦退治の功を一に相模守に帰して、また日蓮聖人の達観偉勲を説者なし」とあるように、歴史的事件としての蒙古襲来を「記念」することよりも、北条時宗像として計画された「元寇記念碑と共に並べ立て」ることで「我祖日蓮聖人の功德」を知らしめることに主眼が置かれていた。この点について「元寇記念祖像鑄設勸化序」はより端的に「此（元寇記念碑の建設）際に乗じて我祖の銅像を鑄造し奉り天下後世をして眉目鼻口を備えたる立正安国論を拝読せしめんと欲す」（括弧内引用者）と述べていた（『新報』明治 22 年 5 月 8 日付 4 面）。

第二に、そこで顕彰の目論まれた日蓮の事跡は前近代から日蓮信仰の中で語り継がれてきたものだった。例えば「論告」に挙げられた「旗曼荼羅」とは、日蓮宗寺院である山梨県身延山久遠寺と押上天松山最教寺とが所蔵する霊宝である。天保 5 - 7（1834 - 36）年刊、斎藤幸雄編、幸孝・月岑校訂『江戸名所図会』に収録された縁起によると、弘安の役の際、日蓮が鎌倉幕府第七代将軍惟康親王の内命を受けて旗曼荼羅を揮毫し九州へ向かう先陣部隊の宇都宮貞綱にそれを授与したところ、神風が起き元軍の水軍が壊滅した、という⁽⁴¹⁾。加えて旗曼荼羅は、享保 5（1720）年述、享保 21（1736）年刊の日省『本化別頭高祖伝』以降、日蓮の伝記的作品にて弘安の役が描かれる際頻出するアイテムとなっていた⁽⁴²⁾。

第三に、《日蓮銅像》は日蓮の「偉功」を「国史ニ載セ」ることを目指していた、すなわち歴史的事実として広く知らしめることを目的としていた。それは銅像として日蓮像が建設されるための必要要件でもあった。前述の通り官有地に銅像を建設する場合、像主の「国家ニ功労アル」ことを届け出なくてはならなかったが、建設運動側は「文応元年」の欄に「立正安国論一卷ヲ鎌倉ノ前執権ニ呈ス」、「弘安四年」の欄に「日蓮大旗ニ大曼荼羅書キ鎌倉將軍ニ呈ス」と記された年表を作成、「四萬余枚ヲ印刷シテ全国ニ」配布した（『新報』明治 22 年 9 月 13 日付 1 - 3 面）。また『像誌』には明治 24（1891）年 3 - 4 月、佐野が《日蓮銅像》建設の官許を巡り、当時の福岡県知事安場保和（1835 - 1899）や内務大臣西郷従道（1843 - 1902）との間で交わした書簡が収録されているが、そこから「日蓮言行事跡取調書」が提出されていたことが分かる⁽⁴³⁾。それと並行して『新報』誌上でも、「立正安国論に事起り、龍の口に事顕われ、蒙古対治に事終る」という日蓮の「元寇降伏の挙は、実に古今忠君愛国の一大亀鑑」であるから「此記念の銅像は国家觀念の標幟」であり「一宗

緇素の共力経営すべき大事業なり、否国家的事業なり」という論法で、銅像建設が宣伝された（『新報』明治25年11月15日付3-4面）。

以上から《日蓮銅像》は、近世以来日蓮信仰の伝統において語り継がれてきた日蓮の「元寇予言」、「元寇退治」を、「国史」に載せるべき「我国の危急を救い給いし我祖日蓮聖人の功德」として、即ち国家的偉勲として新たに価値づけ顕彰する目的で、当初計画されたと言える。

2-2 《日蓮銅像》の意匠と建設目的との関係

このような建設目的は、《日蓮銅像》の意匠を決定するに当たっても大きな役割を果たした。一般に寺院塔頭内に安置される日蓮の肖像彫刻は、右手に払子、左手に法華経を持ち結跏趺坐する像であり、実際の衣をつける着衣像とされる⁽⁴⁴⁾。これに対し《日蓮銅像》は立像で『立正安国論』の卷子本を掲げている。この相違点について原型制作者の竹内は、それは自身の図案が新たに「蒙古調伏の祖師」を表したからだと述べていた。その図像は「想像上より今しも現場の巖頭に立ちて」、「経文の功力に依り蒙古の大軍を睨み返して居る所」を捉えたものであり、「法衣の袖の後方に翻えり居るは、海面より陸の方へ吹き来れる風向即ち乾の方角より吹き来りて賊の艤舳微塵に為りしと云うに拠った」のである⁽⁴⁵⁾。後者の「乾の方角」（北西）とは、例えば『八幡愚童訓』での弘安の役の記事などから竹内が考証した成果だろうし⁽⁴⁶⁾、実際《日蓮銅像》は北西に向けて建てられた。《日蓮銅像》は、掲げる『立正安国論』によって文永の役との、裳裾の翻りによって弘安の役との日蓮の関係を、それぞれ表現した像なのである。

3. 建設意義の転換：「元寇記念碑」としての《日蓮銅像》

3-1 歴史学者からの批判

しかしながら《日蓮銅像》の意義を説く論法は、建設過程で一つの転換を迎えざるを得なかったと考えられる。それは、《日蓮銅像》が顕彰するはずの日蓮の功績が事実性に乏しいことを指摘し、建設に反対する主張がなされるようになったからである。

佐野が官許を巡り交渉中であった明治24年6月、帝国大学臨時編年史編纂掛（現在の東京大学史料編纂所）に務める歴史学者小倉秀貫は、論文「日蓮は元寇の予言者と言うを得べき乎」を発表した。この論文は、同年同月小倉が同大学の史学会にて行った講演を基にしたもので、『新報』（391-395号）や『法鼓』（21, 22号）といった日蓮宗系雑誌のほか、『史学雑誌』（2編10号）や『読売新聞』（明治24年6月19日, 22-24日, 26-29日付）にも掲載、波紋を呼んだ⁽⁴⁷⁾。この論文にて小倉は、直接《日蓮銅像》に言及しなかったものの、明治18（1885）年刊行の『高祖遺文録』に基づいて、蒙古襲来当時の日蓮の功績もその愛国心もともに否定した。小倉によれば「元寇予言」の内幕は、「偶然蒙古の事起こりしより、終に日蓮をして他宗攻撃の辞柄を獲せしめ、安国論をして元寇先見の予言書なりと称し、後人を誤らしむるに至りしなり」といったもので、したがって日蓮には「決して先見の明あるにあらず、且つ此安国論を上りたるも、敢て愛国の衷情に出たるにあらず」ということになる（『新報』明治24年7月3日付12面）。また明治24年11月に刊行された重野安綱監修・山田安栄編纂の『伏敵篇』は、網羅的な蒙古襲来関係史料集であり、同じく臨時編年史編纂掛の関連事業だったが⁽⁴⁸⁾、同書には『立正安国論』を始めとする日蓮関係の文章も「元寇史料」として収録された。そのこと自体は「宗祖ガ元寇予言ノ、安国論等ハ載セテ紙上ニ燦爛タ

リ」と、日蓮宗側にとっても歓迎すべき出来事だったが（『新報』明治 25 年 4 月 25 日付 1 面），他方『伏敵篇』は、「日蓮旗曼陀羅記」は「確証ヲ取ルニタラズ」とあるように、史料批判の観点から日蓮の事跡に再考を迫る性格をも有していた⁽⁴⁹⁾。

3-2 《日蓮銅像》建設への反対

このような歴史学者の主張を根拠として、その後《日蓮銅像》建設への批判が繰り返しなされるようになる。明治 32 年 6 月『太陽』の「時事評論・文芸界」欄は、「安国論の一事を以て、元寇の歴史に付会するが如きは殆んど兒戯に類す」としたうえで「日蓮の像を大宰府に建て、以て元寇の記念と称するは、即ち日本の忠臣義士、別して伊勢の神霊を犯し奉る者に非ずや」と問いただした⁽⁵⁰⁾。同年 7 月の『日本主義』第 25 号の「時評」欄も、「之を博多に建つるも、更に元寇の記念となるべからず、唯単に法華宗の迷信記念像たらむなり」と断じている⁽⁵¹⁾。明治 35（1902）年 7 月、高山樗牛が『太陽』に発表した「日蓮上人と日本国」にて、「旗曼荼羅と称する物の如き、後人俗を欺くの偽物たるや」とし、「近年元寇記念碑と称し、日蓮の銅像を大宰府に建てむとする者あり。是れ亦蒙古調伏の妄誕に依拠せる妄挙のみ」と反論したのも同じ文脈に位置づけられるだろう⁽⁵²⁾。

3-3 「日蓮の銅像」から「元寇記念碑」へ

このような反論に直面した《日蓮銅像》は、その意義を転換せざるを得なかったと考えられる。即ち、日蓮の偉勲を顕彰するための「日蓮の銅像」から、蒙古襲来それ自体を「記念」し、日清・日露戦争下で敵愾心を鼓舞するための「元寇記念碑」として、《日蓮銅像》は建設されると説かれるようになったのである。その結果、本来称揚されるはずだった日蓮の「元寇予言」や「元寇退治」の事実性・特異性が等閑に付される一方で、あくまでも蒙古襲来当時の功労者の一人として、日蓮の「愛国心」や「憂国の情」といった内面性・精神性を強調する言説が重ねられるようになった。

この読み換えを主導したのもやはり歴史学者であったと考えられる。そもそも先述の『伏敵篇』の編纂自体、「元寇記念碑」や《日蓮銅像》のための募金活動の過程で収集された資史料を利用するなど、両者は密接に関係しており、かつ編集に携わった重野も山田も、各地で開かれた演説会にて《日蓮銅像》建設の意義を説いていた⁽⁵³⁾。ただ彼らは共に、日蓮の功績の事実性を留保したうえでその精神性を尊び《日蓮銅像》を支持する、という論法を採っていた。山田は旗曼荼羅について「祖師が延山にて是を建て国家鎮護外敵調伏の祈願せられし事は祖書中の精神に由て必然と存候えども只文献の確証なきのみ」としながらも「御銅像の件は実に愛国護法上至大の関係も御座候」と援護したし（『新報』明治 26 年 7 月 30 日付 19 - 20 面）、重野も「元寇事蹟と日蓮聖人」にて『立正安国論』を「憂国慨世の絶叫」として賞讃しつつ、「予が史学上上人の伝記に反対する所は矢張反対しおること勿論なり」と釘を刺すのも忘れない（『新報』明治 26 年 10 月 10 日付 9 - 12 面）。これらを踏まえ『新報』誌上でも、「日蓮聖祖の銅像を『元寇記念』と称し、而して元寇覆滅の博多に建設するは、其深の因縁と高尚なる理想とを表明するものなり、吾人はここに安国論が元寇予言書なりや否や、聖祖と元寇とは如何の関係を為せしやを煩論せざるべし」などと（『新報』明治 31 年 11 月 28 日付 4 面）、発足当初の「聖祖と元寇とは如何の関係を為せしや」を周知させる目的と銅像建設という手段を転倒させるような言説も現われた。これと並行して《日蓮銅像》の礼拝

像としての性格が意識的に否定され始めた。明治 26 年 9 月頃、日蓮宗系雑誌『日本之柱』3 号にて宗教思想家の中西牛郎（1859 - 1930）は、「日蓮大聖の銅像は既に日蓮教徒の信仰を培養するが為ならず、また日蓮大聖の盛徳大業を表する為めならず〔……〕是れ日本帝国が一大危難を免れたるの記念なるのみ」と明言していた⁽⁵⁴⁾。明治 32 年に第 1 版が刊行された『像誌』は、銅像事業のパンフレットであるにもかかわらず、その巻頭の「緒言」にて「今回建設する所の日蓮上人は素より日蓮宗の日蓮上人にあらず、日本国の日蓮上人、所謂日本の柱たる日蓮上人なれば何の疾しきところかあらん哉」と高唱していた。あくまでも《日蓮銅像》は、「国家の忠勲者として、元寇の予言者として、今日に其功績を表彰し、以て高恩の幾分に酬ゆると共に、千歳の下此偉聖を紹介して内は以て増々国民の国家的精神を養生せしめ、外は以て永く外寇祈攘の本尊たらしめんとす」るために建設されるのである⁽⁵⁵⁾。

他方「国難」として蒙古襲来を喧伝する同時代の論調に追随する傾向が、《日蓮銅像》建設運動にも見られるようになった。そもそも蒙古襲来は、江戸時代末期を除く前近代において日本が全国的規模で外寇に対処したほとんど唯一の例と言えようが、そのため以後他国との間で交渉が緊迫化した際には、何より依拠すべき前例として、しばしば参照されてきた⁽⁵⁶⁾。明治以降も蒙古襲来は、書籍のみならず錦絵、幻燈、講談、教科書の挿絵、歴史画など様々な媒体を通じて「国難」として喧伝され、国防意識の涵養に利用された⁽⁵⁷⁾。公的措置としても明治 29 年 11 月 2 日、文永の役で戦死した鎌倉時代の武士宗助国、平景隆に贈位がなされ⁽⁵⁸⁾、また明治 34 年 3 月 21 日、第 15 回帝國議会議院に「元寇殉難者国祭ニ関スル建議案」が提出、翌日可決された⁽⁵⁹⁾。この流れと呼応するように明治 32 - 33 年に各地で実施された「元寇記念日蓮上人大銅像拝観」の広告文（『新報』明治 31 年 11 月 8 日付広告欄など）には、「元寇撃攘の事は国家無前の壮図にして之を記念せん為に企てたる日蓮上人大銅像建設の業は護国護法の熱誠に出ず」と謳われていた。当日会場では「元寇記念品」が展示され、また会期中には「元寇殉難者」を追悼する「元寇記念祭」が併修されたという。また「宗務院録事」（『新報』明治 36 年 4 月 18 日付 2 面）は《日蓮銅像》の義捐金を再度募った論達だが、そこでも先述の明治 34 年の国会での建議が引き合いに出された。

『像誌』にあった「外寇祈攘の本尊」の言葉通り、東公園の銅像建設地では、明治 27 年 8 月 25 日から三週間は日清戦争の戦勝祈願、明治 37 年 11 月 9 日から二十日間は日露戦争の戦勝祈願の祈祷会がそれぞれ催された。そこからは、あたかも《日蓮銅像》に礼拝すべき靈験が認められていたようではあるが、それはあくまでも宮崎宮や《龜山上皇銅像》⁽⁶⁰⁾とともに「敵国降伏の雄鎮鼎立して」（日龜）いるとの文脈で、または「元寇の当時上には龜山上皇あり、下には北条時宗あり、又上人あり」（廣辻）と位置づけられる限りでのことだった⁽⁶¹⁾。翌日からの戦勝祈願の祈祷会を控えた明治 37 年 11 月 8 日の除幕式では、「神風」を起こした「祈祷者」としての日蓮にはほとんど触れられなかったのである⁽⁶²⁾。これは《日蓮銅像》の建設を日蓮信仰の伝統から明治政府による「元寇殉難者」顕彰・追悼の時流へと位置づけ直すために必要な「バスター」だったと言えるだろう。

4. 《日蓮銅像》の受容について

4-1 《日蓮銅像》の実物はどのように受容されたか

第二・三章では言説上《日蓮銅像》の位置づけが「日蓮の銅像」から「元寇記念碑」へと転換された過程を跡付けた。しかしまた資史料からは、《日蓮銅像》の実物の方が従来の日蓮信仰の粹組

みにおいて受容されていた事情も伺える。そのことについて本稿は、特に「開帳」と「旗曼荼羅」に注目して論述する。

4-2 《日蓮銅像》の「開帳」について

第一章で見た通り、明治 32 年から 33 年にかけて《日蓮銅像》は佐賀へと搬送される途中、「元寇記念日蓮上人銅像拝観」と称して各地で公開された。具体的には明治 32 年 5 月 23 日から三週間の東京深川浄心寺を皮切りに、同年 7 月 25 日から十五日間は名古屋首題寺、9 月 23 日（予定では 9 月 20 日）から十五日間は大坂谷町妙光寺、11 月 19 日から十五日間は岡山市東田町蓮昌寺、明けて明治 33 年 2 月 11 日から十五日間は広島市左官町妙長寺、最後に 4 月 15 日から二十一日間、福岡市東公園にて公開された⁽⁶³⁾。この「銅像拝観」について興味深い点は、バラバラなままのパーツや、巨大な銅像を鑄造するため必要上制作されたに過ぎない雛形（マケット）及び原型もまた、会場では「日蓮銅像」と見なされた点である。その展示方法や展示空間をより詳細に考察するため、深川浄心寺での「銅像拝観」の様子を当時の新聞雑誌の記事から再構成してみよう。

公開の前日までにそれぞれの《日蓮銅像》は信徒による出迎えを受けていた。銅像の完成部分は前年の 11 月 8 日に既に到着していたが、原寸大木製原型は東京美術学校から深川浄心寺へと運び出された（『読売新聞』明治 32 年 4 月 16 日付 4 面）。五十分の一銅製雛形は身延山久遠寺第七十七世の日巖（1848 - 1898）の開眼後、佐野が持参して全国を回っていたが、いったん芝の円珠寺に持ち込まれ、5 月 21 日午前 7 時に出迎えを受けた。雛形は信徒に担がれ隅田川沿いを北上、小伝馬町祖師堂にて昼食の後、南進して日本橋・両国界隈を練り歩き深川浄心寺に到着した（『新報』明治 32 年 5 月 18 日付 29 - 30 面）。

当日の様子は以下の通りだった。寺内に入ると中門左右に蒙古襲来に活躍した大名の旗馬印が建てられ武者人形が飾られていた。『立正安国論』講義が行なわれる本堂の左側には五丈五尺の仮小屋が設けられ、そこへ安置された木製原型は前面に降ろされた紫の幕にて胸から上が隠され、「下足料」一銭払って梯子を登ればその姿を見ることができた（『万朝報』明治 32 年 5 月 27 日付 3 面）。木製原型の前には五十分の一銅製雛形が安置され常駐する僧侶が経をあげていた。首、手、安国論、数珠の銅像部分は、鬼子母神堂にて天覧の蒙古兜、旗曼荼羅とともに展示された（『新報』明治 32 年 5 月 28 日付 31 面）。正面に矢田一嘯の手になる「元寇油絵」が掛けられた七面堂と妙見堂は、百余の「元寇記念品」の陳列場とされた（入場料五銭）。その内訳は、蒙古襲来関連人物の図像や資料（宮崎宮の額面「敵国降伏」の写し、北条時宗の画像、蒙古首切り塚の碑など）、当時の武具・防具（鞍・鎧・冑・銃・蒙古半弓）、仏具（金剛杵・香炉）、絵画（菊池容斎の「宗祖画像」、松本楓湖の「蒙古襲来絵巻物」）など「元寇」にまつわる様々な品物が雑多に展示されていた（『新報』明治 32 年 5 月 28 日付 31 面）。来場者全体について具体的な数字は不明だが、「府下数百の講中追々参詣し」ていたとの報道がある（『読売新聞』明治 32 年 5 月 26 日付 4 面）。来賓客については、一条実輝、柳原愛子、北白川宮成久王妃房子内親王といった皇族や華族、広橋賢光や長岡護美ら官僚、海軍次官、陸軍歩兵大尉ら軍人、富田鐵之助ら実業家、大槻文彦ら学者などが拝観・寄付に訪れた（『日本之柱』78 号、明治 32 年 8 月 2 日付）。

4-3 出開帳の宿寺としての深川浄心寺

このような「銅像拝観」が実現した理由の一端は、開催場所が深川浄心寺だった点にあったと考えられる。何故なら深川浄心寺は、近世以来日蓮宗の出開帳を受け容れる宿寺としての役割を果たしてきた寺院であり、その境内ではしばしば日蓮の肖像彫刻が公開されていたからである。深川浄心寺は、宝暦3（1753）年から文久3（1863）年に至るまでの計十回の身延山久遠寺からの出開帳を全て受け容れていた⁽⁶⁴⁾。また浄心寺は江戸時代を通じて計二十三回出開帳の宿寺となったが、これは江戸の日蓮宗の寺院の中では最多だという⁽⁶⁵⁾。近代にも浄心寺は、例えば明治27年5月8日から二十五日間（『新報』明治27年5月8日付18 - 19面）、及び明治33年4月2日から26日まで（『新報』明治33年3月28日付33面）の身延山の出開帳でも宿寺として選ばれていた。当該記事を読むと、明治32年の「銅像拝観」の際五十分の一銅製雛形が迎った出迎えのルートは、出開帳の際の出迎えの道筋をなぞるものであったことが分かる。実際「銅像拝観」は各種新聞によって「日蓮大木像の開帳準備」（『東京朝日新聞』明治32年5月12日付5面）、「深川浄心寺の開帳」（『読売新聞』明治32年5月26日付4面）などと、あくまでも「開帳」として捉えられていた。「銅像拝観」は、日蓮の肖像彫刻の出開帳を行なうノウハウを援用するかたちで実施され受容されたと言える。

4-4 旗、銅像、戦争

先述したとおり旗曼荼羅は、特に歴史学者によってその信憑性が疑問視されたものの、それが完全に忘れ去られたわけではなかった。それどころか旗曼荼羅の実物やその模造品は、全国で実施された戦勝祈願の祈祷会にてしばしば公開されていた。

そもそも旗曼荼羅は幕末から「外船撃退」の祈祷会にて本尊として掲げられた記録が残っているが⁽⁶⁶⁾、表1から明らかな通り、近代以降、特に日清・日露戦争中にも旗曼荼羅は集中的に公開されていたことが分かる。旗曼荼羅は《日蓮銅像》とも関係していた。例えば明治27（1894）年8月18日から福岡市東公園の銅像建設予定地にて修された「皇軍勝利敵国降伏の大祈祷会」では、本佛寺の壇徒が「元寇当時に用いられし日月両旂の曼陀羅に模倣し新調」した旗を献納したし（『新報』明治27年9月8日付28面）、明治32（1899）年4月15日より三週間、深川浄心寺鬼子母神堂内にて銅像の鑄造済み部分と共に旗曼荼羅が公開されたことは先にみた通りである（『新報』明治32年5月28日付31面）。明治37（1904）年11月9日から二十日間《日蓮銅像》前で営まれた「大國禱会」では、「本尊」として旗曼荼羅が祈祷を受けていた（『新報』明治37年11月21日付11面）。言説からは姿を消した旗曼荼羅でも、現場では公然と掲げられていたのである。

5. 結論

近世以来の日蓮像が近代の国家主義とスミーズに結びついた結果、《日蓮銅像》が建設された、との先行研究の考察は、厳密に言えば正確ではない。《日蓮銅像》は、歴史学者からの批判を踏まえて、蒙古襲来当時の日蓮の貢献を顕彰するための「日蓮の銅像」から、蒙古襲来それ自体を「記念」しかつ日清・日露戦争下で愛国心を鼓舞するための「元寇記念碑」へと、その意義が読み換えられることで建設に至ったのである。この転換とともに、日蓮の事績への言及は抑制された代わりに、蒙古襲来当時の功労者の一人としての日蓮の内面性・精神性が強調されるようになった。これ

は《日蓮銅像》の建設が、日蓮信仰の伝統の文脈から「国難」としての元寇顕彰の文脈へと再配置されるために必要なバーターであった。

しかし他方《日蓮銅像》の実物は、礼拝像と同様の方法で「開帳」されていたことが端的に示すように、日蓮信仰の伝統の枠組みで受容されていた事情が伺える。そしてそのことは、言説上の評価と互いに矛盾するどころか、旗曼荼羅の併置に見られるように、実践面から日蓮の「元寇予言」、
「元寇退治」の事跡を支持しつつ、「戦勝祈願」として言挙げされた《日蓮銅像》の機能を下支えしていたのである。

除幕後《日蓮銅像》がどのように論述され受容されたのか、これを更に追いかける作業は別稿に譲りたい。

表 1 明治期における旗曼荼羅の公開（『日宗新報』明治 22 - 37 年の巻号より抜粋）

日時	場所	種類	典拠
1891/8/27	久遠寺	久遠寺	405 号 8 面
1891/9/14-20	最教寺	最教寺	405 号 16 面
1892/1/15,16	最教寺	最教寺	416 号 15 面
1892/5/20,21	最教寺	最教寺	431 号 15 面
1893/9/19-25	最教寺	最教寺	505 号 16,17 面
1894/7/28	豊前中津大法寺	模造	538 号 27 面
1894/8/1-7	久遠寺	久遠寺	538 号 16 面
1894/8/18-24	博多東公園	模造	540 号 28 面
1894/8/25-27	越中高岡市大法寺	模造	540 号 23 面
1894/8/27,28	久遠寺	久遠寺	538 号 16 面
1894/9/22-24	能登七尾長壽寺	模造	543 号 14 面
1894/9/26	札幌区豊平川岸边	模造	543 号 16,17 面
1894/11	横浜妙高寺	模造	546 号 14 面
1894/12/19-21	備後福山妙政寺	模造	553 号 26, 27 面
1897/4/4-8	深川浄心寺	久遠寺	627 号
1899/5/23-6/13	深川浄心寺	?	705 号 31 面
1904/1/21	最教寺	最教寺	875 号 26 面
1904/2/12-14	北越	模造	880 号 27 面
1904/2/14-20	報国義会神奈川県足柄支部	模造	884 号 28 面
1904/2/13	久遠寺	久遠寺	879 号 27 面
1904/2/14-20	深川浄心寺	最教寺	879 号 29 面
1904/5/8	卯辰山題目堂前	模造	885 号 28 面
1904/5/20,21	最教寺	最教寺	875 号 26 面
1904/6/3-7	日本橋小伝馬町祖師堂	最教寺	887 号 23 面

1904/9/21	最教寺	最教寺	875 号 26 面
1904/11/9-12/28	博多東公園	最教寺	906 号 13 面

註

- (1) その呼称は「日蓮聖人銅像」,「日蓮上人銅像」,「日蓮上人立像」,「博多大銅像」,「元寇記念宗祖銅像」など様々であるが,本稿では「日蓮銅像」に統一する。
- (2) 木下直之『銅像時代 もうひとつの日本彫刻史』岩波書店,2014年,18頁。
- (3) 石井研堂『増訂 明治事物起源』春陽堂,1926年,36頁。
- (4) 竹田直樹「公的空間の彫刻作品に対する規制と撤去・破壊の史的変遷:公的空間における彫刻作品の存在意義および性質について1」,『デザイン学研究』88号,1992年,153-160頁。
- (5) 北澤憲昭「モニュメントの創出——彫刻の近代化と銅像」,高階秀爾・陰理鉄郎・田中日佐夫編『日本美術全集第22巻 洋画と日本画 近代の美術Ⅱ』講談社,1992年,186頁。
- (6) 『公文録』明治10年,第18巻,明治10年1月,内務省伺(2)(国立公文書館所蔵)。なお同伺の適用例については,清水重敦「『官社へ銅石設立之儀ニ付伺』考——京都の創建神社と明治前期のモニュメント概念」,『近代画説』第22号,2013年,112-129頁を参照。
- (7) 『地理局例規 完』内務省地理局,1891年,49-50頁。
- (8) 『官報』5061号,明治33年5月19日付,265頁。
- (9) 『太陽』第5巻14号,明治32年6月20日付,64頁。
- (10) 澁谷明恵「研究資料」,北澤憲昭総監修・田中修二監修『シリーズ・近代日本のモニュメント 1 銅像写真集 偉人の倣〔資料篇〕』ゆまに書房,2009年,451頁。
- (11) 平瀬礼太『銅像受難の近代』吉川弘文館,2011年,13-14頁。
- (12) 安丸良夫「近代転換期における宗教と国家」,安丸良夫・宮地正人校注『日本近代思想大系5 宗教と国家』岩波書店,1988年,553-559頁。
- (13) 木下,前掲書,142頁。
- (14) 上野雅生『現代の福岡市』九州集報社,1916年,270頁。
- (15) 大坪潤子「日蓮聖人像」,田中修二編『近代日本彫刻集成 第一巻 幕末・明治編』国書刊行会,2010年,157頁。
- (16) 『西日本新聞』昭和54年3月7-10,12,13,15-17,19-20,23-24,26,28-31日,4月1,3-5日,6月19-23,25-29日,7月2-7,9-14,16-21,23-28,30-31日,8月1-4,7-11,13-16,18,20日付3面。
- (17) ただし総重量に関しては台座の分も含めた数字,または銅合金の全集荷量との指摘もある。中牟田佳彰・田中一幸・木下禾大『福岡市東公園日蓮上人銅像 制作工程と歴史資料』西日本新聞社,1986年,48頁。
- (18) 小野学鶯編『元寇記念日蓮銅像誌』第四版,立正社,1930年,68頁。
- (19) 中牟田ほか,前掲書,190-197頁。
- (20) 「銅造日蓮上人立像」(福岡市経済観光文化局文化財部文化財保護課「福岡市の文化財」,http://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/cultural_properties/detail/222),2018年2月2日閲覧。

- (21) 明治 23 年末時点での福岡市内の寺院宗派別割合は、全八十六寺中、真宗二十三寺、浄土宗十九寺、臨済宗十三寺であり、日蓮宗はそれに次ぐ十寺であった。福岡市編『福岡市誌 全』積善館、1891 年（1968 年復刊）、67 - 68 頁。
- (22) 湯地の経歴については、仲村久慈『湯地丈雄』牧書房、1943 年（梓書院、2015 年復刊）を参照。
- (23) 以下「元寇記念碑」設置運動については、明治 37 年 12 月 26 日《亀山上皇銅像》の除幕式に合わせ配布された「元寇記念碑来歴一斑」を参照。古田隆一『福岡県全誌 下編』安河内喜佐吉、1906 年、321 - 337 頁に収録。なお当該資料も含む「元寇記念碑」設置運動の関連資料集として、太田弘毅編『元寇役の回顧 記念碑建設史料』錦正社、2009 年がある。
- (24) 広告は、太田編、同書、65 - 67 頁に収録。
- (25) 太田暁子「ふくおかの記念碑めぐり 1」（福岡市博物館ホームページ、<http://museum.city.fukuoka.jp/archives/leaflet/289/index.html>）、2018 年 2 月 11 日閲覧。
- (26) 荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部、1929 年、3 - 9 頁など。
- (27) 日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』東京堂出版、1981 年、505 頁。
- (28) 《日蓮銅像》設立運動の経緯については、小野編、前掲書、42 - 137 頁。
- (29) 以上の経緯は、湯川日淳『管上小伝』元寇記念館、1934 年、9 - 11 頁による。
- (30) 芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第一巻』ぎょうせい、1987 年、177 - 178 頁。
- (31) 島田佳矣「観山下村春三郎君の追憶」、『東京美術学校校友会月報』29 巻 2 号、1930 年、41 頁。
- (32) 福岡市博物館の所蔵する「元寇記念日蓮大士銅像縮図」（元寇記念宗祖銅像建設事務所、明治 25 年 11 月 26 日付）には、彫刻主任として竹内久一、鑄造主任として岡崎雪声の名前が記されている。
- (33) 福岡市博物館監修『福岡博覧』海鳥社、2013 年、106 頁。
- (34) 兵庫県立近代美術館・神奈川県立近代美術館編『図録 描かれた歴史 近代日本美術にみる伝説と神話』「描かれた歴史」展実行委員会、1993 年、136 - 137 頁。
- (35) 川添昭二『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版、1977 年、111 - 143 頁。
- (36) 佐野前暁編『博多大銅像百年祭記念出版 日蓮聖人大銅像百年の歩み』日蓮聖人銅像護持教会、2004 年、16 頁。
- (37) 日蓮宗事典刊行委員会編、前掲書、824 頁。
- (38) 川添昭二・中尾堯・渡辺宝陽・坂輪宣敬監修『図説 日蓮聖人と法華の至宝 彫刻 第四巻』、同朋舎メディアプラン、2013 年、127 頁。なお参考図書の類を除き《日蓮銅像》を主題とした日蓮宗史研究の論文は管見の限り見当たらない。
- (39) 明治 22 年 1 月、『日蓮宗新報』を改称、東京府荏原郡池上村から創刊（月三回発行）。大正 3（1914）年に法華会から月刊誌『法華』が刊行され、大正 5（1916）年 12 月に宗務院から『宗報』が発行されるまでは、日蓮宗の教誌的存在であり、報道機関誌であった。昭和 2（1927）年 3 月をもって廃刊。日蓮宗事典刊行委員会編、前掲書、822 - 823 頁。
- (40) 頻繁な募金の懇願を揶揄する記事（『新報』明治 32 年 9 月 8 日付 31 面）、設置場所につい

て疑問を呈する記事（『新報』明治 37 年 8 月 11 日付 20 面）の二件。

- (41) 原田幹校訂『江戸名所図会 下』人物往来社，1967 年，1936 頁。
- (42) 藤田文哲「旗曼荼羅及宗牒に就きて」，『大崎学報』26 号，1913 年，15 頁。
- (43) 小野編，前掲書，47 - 54 頁。
- (44) 浅見龍介「日蓮聖人の肖像彫刻」，川添他監修，前掲書，91 頁。
- (45) 小野編，前掲書，66 - 67 頁。
- (46) 「去七月晦日夜半ヨリ乾風オヒタヘシク吹テ。閏七月一日。賊船悉漂蕩シテ海ニ沈ヌ」。「八幡愚童訓 類従本」，塙保己一編『群書類従 第一輯 神祇部』卷十三（訂正三版），1983 年，417 頁。ただし竹内は，像の容貌を考証し決定するに当たって，本人や直弟子が制作に関与した，いわゆる寿像と伝えられる日蓮の図像十数点を諸寺院で拝観し参考にしたとも述べていた。『新報』明治 29 年 1 月 28 日付 22 - 23 面。
- (47) 小倉の論文およびそれへの反対論文は，清水龍山『立正安國論講義』佛教聖典講義刊行会，1935 年，40 - 161 頁にまとめて再掲されている。論争全体の評価については，川添，前掲書，130 - 137 頁を参照。
- (48) 川添，同書，114 頁。重野安繹，山田安栄はどちらも小倉と同じく編纂掛にて修史事業に従事した歴史学者である。
- (49) 重野安繹監修，山田安栄編纂『伏敵篇』卷之一，吉川半七，1891 年，3 頁。国立国会図書館デジタルコレクションにて公開（<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2387705>），2018 年 2 月 11 日閲覧。
- (50) 『太陽』第 5 卷 12 号，明治 32 年 6 月 5 日付，57 頁。
- (51) 『日本主義』25 号，明治 32 年 7 月 30 日付，27 - 28 頁。
- (52) 『太陽』第 8 卷 9 号，明治 35 年 7 月 5 日付，181 - 182 頁。
- (53) 川添，前掲書，111 - 113 頁。
- (54) 原文未見。小野，前掲書，73 - 76 頁に収録。
- (55) 小野，同書，3 頁。
- (56) 川添，同書，61 頁。
- (57) 兵庫県立近代美術館他編，前掲書，136 - 144 頁。
- (58) 『官報』4006 号，明治 29 年 11 月 4 日付，18 頁。
- (59) 『官報』5312 号，明治 34 年 3 月 22 日付，366 - 367 頁。
- (60) 「元寇記念碑」の意匠は明治 35 年前後に亀山上皇へと変更された。原型は福岡出身の彫刻科山崎朝雲（1852 - 1934）が担当，明治 35 年 9 月に完成，鑄造は佐賀谷口鉄工場が担当，明治 37 年 12 月 25 日に除幕式を迎えた。なお当初「百尺」とされた《日蓮銅像》の像高は《亀山上皇銅像》の像高を越えないよう調整された。現在でも後者の方が冠の分だけ高くなっている。中牟田他，前掲書，97 頁。
- (61) 明治 37 年 11 月 8 日除幕式での祝言。管見の限りその内容を確認できたのは以下の十人分である。久保田日亀（日蓮宗第十五代管長），村雲日栄（京都瑞龍寺門跡），毛利日有（京都妙覚寺），黒田長成（侯爵），江藤正澄（太宰府神社宮司），河嶋醇（福岡県知事），松下直美（福岡市市長），廣辻信次郎（筑紫郡長），鈴木力（天眼）（ジャーナリスト），山田

安栄（歴史学者）。なお文面は小野，前掲書，116 - 130 頁に収録。一部は『新報』明治 37 年 11 月 21 日付 7 - 11 面，『福岡日日新聞』明治 37 年 11 月 9 日付 4 面，『九州日報』明治 37 年 11 月 9 日付 5 面などにも掲載された。

- (62) 祝言のうち「旗曼荼羅」に明確に言及したのは日亀一人のみであり，中には黒田のように《日蓮銅像》を「元寇紀念碑」としか呼ばず日蓮の事績に一切言及しない祝辞も見られた。これに対し当時まさに来場者の，そして除幕された銅像の眼前で展開していた日本・ロシア両海軍の動静には十人中八人が言及している。
- (63) 『日本之柱』76, 78 - 82, 84, 85, 88 号（明治 32 年 5 - 7 月付）広告より。
- (64) 比留間尚「江戸開帳年表」，西山松之助編『江戸町人の研究 第 2 卷』吉川弘文館，1973 年，473 - 548 頁参照。
- (65) 比留間尚『〈江戸〉選書 3 江戸の開帳』吉川弘文館，1980 年，158 - 161 頁。
- (66) アメリカ軍インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが浦賀に来航した嘉永 6（1853）年の事例や生麦事件を受け薩英戦争の勃発した文久 3（1863）年の事例などが報告されている。望月真澄「幕末期の社会と法華信仰—江戸城大奥女性の旗曼荼羅信仰を中心として—」，立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教学とその周辺』山喜房佛書林，1993 年，445 - 458 頁。

Monument to Worship:
On the Historical and Religious Significance of the *Nichiren Statue*
in Higashi Park (Hakata-ku, Fukuoka)

Kohei TAKASE

The *Nichiren Statue* is a bronze statue of Nichiren (1222-82), a Japanese Buddhist priest during Kamakura period. It is 10.6m in height and 74.25kg in weight. In 1890, Zenrei SANO (1859-1912), a Nichiren Buddhist monk, drew up a project to build this statue in Higashi Park (Hakata-ku, Fukuoka) and led its fund-raising campaign. A sculptor named Kyuichi TAKENOUCHI (1857-1916) designed and carved its wooden models and from them Sessei Okazaki (1854-1921), a caster, and Taniguchi Ironworks in Saga founded this work, which was finally unveiled in 1904.

Ever since its completion, visitors have often burned incense to offer it to the statue. However, what is rather puzzling is that its location is not inside a temple but in a park, out in a public, open space. This is especially surprising considering that the building of the sacred statue was restricted by the government of Meiji Japan. Why is that the *Nichiren Statue* was allowed to be planned and erected in a park?

This paper aims to follow the discourses on the purpose and significance of the *Nichiren Statue* during its construction process and attempts to interpret the meaning of the change in terms of its tone and logic in the social, political, and religious contexts at time. The author mainly explores “Nisshu Shimpō,” the organ of Nichiren Buddhist sects in Meiji and Taisho period.

The following conclusions are obtained as a result of this study:

1) The *Nichiren Statue* was initially planned to be built on the site of its old battlefield in order to publicly honor the “services” of Nichiren during the Mongol Invasions of Japan, which took place in 1279 and in 1281. However, after the credibility of Nichiren’s deeds, in Nichiren Buddhist sects to be a prophecy of and a prayer for repelling the Mongol Invasions, came to be doubted by historians, it began to be claimed that the *Nichiren Statue* was not the statue of Nichiren to worship but the monument to the Mongol Invasion itself to incite patriotism under the outbreak of the First Sino-Japanese War (1894-95) and the Russo-Japanese War (1904-05).

2) Despite the transition in the arguments for it, the *Nichiren Statue* was viewed and exhibited in practice just like other portrait sculptures of Nichiren to worship. In 1899 and 1900, the casted parts of the statue, its full-scale wooden model, and its 1/50 scale iron maquette were opened to the public within the temple grounds on the way from Tokyo to Fukuoka. This event was held enthusiastically and was called “Kaicho,” which was the ceremony of revealing hidden Buddhist images as the way for visitors to worship them and for their temples to collect donations mainly during the Edo period.